益田市の歴史文化の特色（全7回）

第6回　日本海に漕ぎ出した益田の人々

【問い合わせ先】
市文化財課　☎31-0623

益田の人々は、縄文の昔から日本海に舟を漕ぎ出し、国内外の様々な地域と交流・交易を展開していました。

匹見の縄文遺跡群からは、大分県姫島産の黒曜石製の鏃や新潟県糸魚川産の翡翠製棗玉などが出土しています。すでに当時の益田がこれらの地域と交易により結びついていたことを示しています。沖手遺跡（久城町）の縄文時代晩期の地層からは、丸木舟が出土しました。この丸木舟が実際に日本海を渡ったかはわかりませんが、当時の益田の人々がその手段を持っていたことは確かです。

豊田神社（横田町）の奥の院石塔寺権現から出土した陶製経筒五口や、東仙道土居遺跡（美都町仙道）から出土した四耳壺からは、中世前期の中国との交易による結びつきがうかがわれ、これらと同時代の交易拠点であったと考えられる沖手遺跡成立の背景として注目されます。また、兵庫県の六甲や福井県の日引などからもたらされた中世の豊富な石造物は、益田が交易の重要拠点であったことを示しています。

これら縄文以来の日本海・東アジア交易の流れを汲み、益田が大きく繁栄したのが中世益田氏の時代です。益田氏は研究者から「海洋領主的性格」が指摘されていますが、それを証明するかのように、日本の中世の港町の遺跡を代表する中須東原遺跡（中須町）が発見されました。同遺跡は遺構・出土品ともに全国屈指の内容を誇ります。益田氏の「海洋領主的性格」は、益田の人々の積極的な交流・交易に支えられたものと考えられています。

そして、それらの交流や交易は益田氏が去った後も続き、西廻り航路の盛況の中で、今市（乙吉町）が繁栄したほか、高津や飯浦が津和野藩の重要な港に位置づけられました。

提灯と大漁旗をつけた櫂伝馬船とご神船が、男衆のかけ声とともに高津川に漕ぎ出す船神事「ホーランエー」。豊漁・安全祈願とも、北前船を迎える様子を再現したともいわれます。